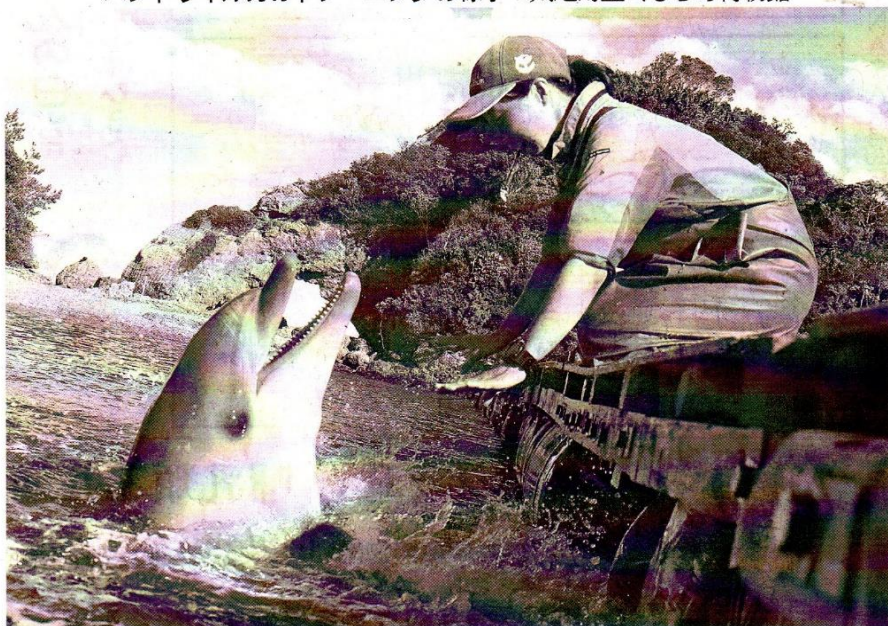


バンドウイルカのトレーニングの様子—太地町立くじらの博物館



餌なしでも自発的に行動

日々のトレーニング

遊歩道から誰もいない生け簀の方に目をやると、1頭のバンドウイルカがステージの前で顔を上げていた姿がありました。そのバンドウイルカがいつも餌を食べている場所です。

餌が欲しくて、トレーナーが来るのを待っているのでしょうか。

次の瞬間、顔を上げたまま勢いよく回り始めました。ピタッと動作を止めると、ステージに向かって静止し、少し経つと、むなびれを振るなど別の動作を始めたのです。

実は、顔を上げて待っていたのは「スタンディング」というトレーニングにおける基本姿勢です。そして、回る動作は「回転」という種目で、動作を止めたのはOKの意味を持つホイッスルが吹かれたときの反応です。

この一連の行動は、日々トレーナーが給餌を兼ねて行うトレーニングの風景です。それを、誰もいない、しかも報酬の餌ももらえない状況で、その過程を見事に再現していたのでした。イルカのエアートレーニングとも言えるのでしょうか。

動物の異常行動の一つに、特に目的をもたない一定の動作が繰り返される「常同行動」が知られていますが、それとは明らかに違うものです。意思を持ち、強制的ではない、自発的な行動でした。

イルカのトレーニングは、ショーなどの展示のみを目的としているわけではありませぬ。例えば、体温測定や血液採取、そして身体測定などは、トレーニングを施すことで日常的に可能となり、健康管理に役立っています。

また、適度な運動の機会になったり、単調になりやすい飼育環境への刺激になったりするなど、環境エンリッチメント（動物の福祉と健康の向上）としても注目され、イルカ飼育の質の向上が期待されています。ただ、トレーニングがイルカに対し、不信感を与えたり、押し付けであったりしないように気を付ける必要があります。

さて、今回、観察されたバンドウイルカの行動からは、少なくとも、トレーニングが負担になっているとは思えませんでした。むしろ、刺激的で、楽しく、意欲的になれることがうかがえました。「良いトレーニングができています」と、トレーナー冥利に尽きるひと時でした。

（太地町立くじらの博物館 副館長 稲森大樹）